

平成20年度研究報告書

研修評価に関する研究

—児童福祉臨床での有益性を評価の視点とした
研修プログラムの作成について—

研究代表者 平山 英夫 (子どもの虹情報研修センター)
共同研究者 増沢 高 (子どもの虹情報研修センター)
大川 浩明 (子どもの虹情報研修センター)
南山今日子 (子どもの虹情報研修センター)

社会福祉法人 横浜博萌会

子どもの虹情報研修センター

(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

平成20年度研究報告書

研修評価に関する研究

—児童福祉臨床での有益性を評価の視点とした
研修プログラムの作成について—

子どもの虹情報研修センター

目 次

1. はじめに —問題と目的—	1
(1) 研修の「評価」について	1
(2) 対人援助領域における評価の難しさ	1
(3) 研修の目的の明確化	2
(4) アセスメント力の向上を目的とした研修の企画と評価	3
(5) 研修の評価	5
2. 方法	7
(1) 対象者	7
(2) 評価の対象	7
(3) 分析（評価）の方法	7
3. 結果	8
(1) 「研修後アンケート」の結果	8
(2) 「支援プラン作成シート」の分析	9
(3) 「振り返りシート」の分析	10
4. 考察	14
(1) 参加者の主観的な評価	14
(2) 「支援プラン作成シート」の分析	14
(3) 「振り返りシート」の分析	14
(4) 一定の評価が得られた要因	15
(5) 研修の課題	16
引用・参考文献	16
資料	17

1. はじめに ―問題と目的―

(1) 研修の「評価」について

子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター、以下「センター」とする）は、全国の児童相談所や児童福祉施設、市区町村等において指導的立場にある職員を対象に、子ども虐待防止に関する研修等を実施している機関である。平成14年4月の開設以来、年間20本以上の研修を行っている。企画する研修とそのプログラムは、現場の実状やニーズ、児童虐待施策の動向等の把握に努め、併せて各研修終了時に聴取している研修参加者からの感想・意見を踏まえて策定している。

研修の実施にあたっては、その研修内容が研修目的にどれだけ適ったものであったかの評価は欠かせない。しかしその一方で、妥当性が確保された精度ある効果測定を行うことは非常に困難であることも事実である。

研修評価の試みとしてよく目にするのは、研修後に「アンケート」を実施し、その結果を評価の指標とするものである。たとえば研修プログラムに対して「良かったか否か」、「勉強になった否か」などを段階評価で尋ねるものである。センターでも研修参加者に対してこのような「研修後アンケート」を実施し、研修評価の一指標として活用している。しかし、例えば参加者がその研修プログラムの講師の話に「よかった」と答えたとしても、単に興味を持ったのみで参加者自身の力量アップにつながったか否かは分からない。あるいはその研修が現場にとってどれだけ有益なものかは、この回答から推察するしかない。

目的が明確でその達成度が目に見えるものであれば評価はしやすい。身近な例として、自動車運転免許取得のための教習所カリキュラムが挙げられる。教習所での講習の目的は、車の運転ができるようになることであり、それが評価基準となる。商業の分野では売上が何よりも大きな評価基準となる。いずれも達成目標が明確であり、目標の達成度も分かりやすい。ゆえに評価基準も明確となる。これらは「目標達成＝評価のシンプル・モデル」ということができよう。このようなシンプル・モデルには学校で行われる知識の定着度を測るテスト、パソコンの技術習得研修と到達度を測る試験等がある。ただそこにおいては、例えば自動車が運転できて幸せになったか、売り上げが多い商品が本当に人を幸せにするかといった、人間の生活のより本質的な要素は問われておらず、そこまで評価するとなると途端に難しい課題となる。

(2) 対人援助領域における評価の難しさ

問題は、センターの研修対象である対人援助分野における研修が、こうしたシンプル・モデルで評価可能かという点である。対人援助分野においてはこうした具体的な達成目標を描きにくいのが実際ではなかろうか。子どもの抱き方、食事の作り方、清掃の仕方などといった一定のスキルや技術については、シンプル・モデルで評価可能だが、児童福祉領域での臨床現場で習得すべきスキルは多岐に及び、短期間の研修の中で必要な全てのスキル習得を実現することは不可能である。たとえ数多くのスキルを習得したとしても、それで援助職として充分かといえ、決してそうではない。また「ほめ方」

などの対人援助スキルを身につけたとしても、対象となる子どもや保護者の特性に応じた微妙な工夫が必要となる。特に社会的養護の対象となる子どもの場合、抱えた課題が重篤であるがゆえに、その子どもに適うように臨機応変に工夫して関わる感性を磨くことが必要となろう。特にスーパーバイザー（SV）として援助を行う職員は、一定のスキルを習得した上で、ケースによって臨機応変に適切なスキルを選択し工夫できる力、限られた情報の中でケースの本質を見抜くアセスメント力、その時々での迅速な判断力や決断力、チームをまとめる力やリーダーシップ、底流に流れる人としての器の大きさや人を尊重する姿勢などバランスのとれた全体的な資質向上が求められる。こうした側面を研修目標とし、それに向けた研修プログラムを設定することは非常に難しい課題である。

しかし今日現場で求められているのはそうしたリーダーの存在である。社会的養護の検討委員会報告書の中でも、施設で中心となる基幹職員の必要性が指摘され、そうした職員の養成が重要課題としてあげられているのもその反映でもあろう。リーダー養成という目標に適った研修プログラムを厳密な評価を繰り返す中で作り上げていくことが、近年強く求められているのである。

対人援助分野における研修で、研修企画と効果測定を試みたものはいくつかある。保健分野では、「平成14年度地域保健総合推進事業 乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会報告書」（乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会、2002）において、虐待を行う養育者への支援者育成のための研修プログラムの作成と評価を行っている^{（注1）}。また、日本子ども家庭総合研究所の加藤・小山他（1999）が実施した「母子保健要員の研修体系策定に関する研究（Ⅳ）—研修技法による効果差についての基礎的研究—」^{（注2）}は、研修手法と研修効果との関連に重きを置いた研究である。しかし、これらにおいても、前者は最低の習得すべき技術やスキルの獲得を目的とし、シンプル・モデルで評価可能であるが、援助者としての全体的な資質向上にまでは及んでいない。後者については、研修参加者の自己評価をもとにした評定であり、主観的評価の域を出ず、参加者の回答が目標達成の妥当性を満たすものではない。センターでも研修のあり方について分析し、「児童虐待をテーマとした研修の在り方について—子どもの虹情報研修センターにおける児童相談所、児童福祉施設職員対象の研修を通して—」（2005）として報告書にまとめたが、^{（注3）}その研究でも、各研修については参加状況、および参加者の研修後アンケート等からの主観的評定をベースとした分析に留まっている。

シンプル・モデルで扱いやすい援助技法習得のみを研修内容として設定すれば評価はしやすくなる。しかし、先述したように現場で求められているのはSVとしての役割を担うリーダーの養成である。実際参加者に行った研修に対する要望のアンケート結果からも、具体的なスキルの習得を求める声は少なく（子どもの虹情報研修センター研修部、2009）、また特定化されたスキル習得は様々な場で行われている現状もある。センターに求める参加者のニーズは具体的なスキル習得に限らず、メタスキルともいえるべき支援の根底を支える力や能力の学びといえよう。

（3）研修の目的の明確化

重要なのは、そうした支援の根底を支える力や能力を養うために何が必要かを検討することである。

それは援助者としての特定の理想像を描くことではない。過去様々な実践家が理想像として語られ分析されてはいるが、その像は様々であり、かつ何人も同じ人に成りえるはずもない。さらに児童相談所や児童福祉施設等では、多様な個性を持った援助者が有機的に連携・機能することで援助が成り立っており、単一個性で成り立つチームは有害ですらあろう。そうではなく、援助者として個性はあろうとも共通して持ち得るべき力や能力といった側面の抽出である。

四方他（2009）は、センターで行う事例検討を分析し、児童相談所と児童福祉施設のそれぞれの事例検討で見いだされた課題を整理・分析し、それぞれの援助者に求められる要件を検討している。それによると児童相談所と児童福祉施設の両方に課題として指摘されているものはアセスメント力の向上である。アセスメント力とは、情報を総合的に集約、分析し、ケース理解に基づいて適切かつ具体的な援助方針をうちたてることであり、これが不明確であるためにその後の援助が霧の中をさまようがごとく困難となるケースが少なくないことが多くの事例で示されている。加えて児童福祉施設においては、さまざまな課題が提示されているが、いずれの施設種別で共通に求められる課題をまとめると、以下の2つに絞られよう。

①家族支援の向上：関わりの困難な家族をいかに支えるか。子どもと家族とが安心して関われる場を見出し、支えること。

②チームアプローチの向上：多職種による協働のあり方。職員が他の職員に支えられ、SVに支えられ、他の機関に支えられるという重層的なサポートシステムの構築。

これを踏まえると、現在援助者として求められる要件は以下の3つに集約される。

①ケースをアセスメントする力

②家族支援を充実させるための知識、スキル、資質の向上

③良好な援助チームを構築し、維持する力

（4）アセスメント力の向上を目的とした研修の企画と評価

これを踏まえ、センターでは、平成20年度児童養護施設職員指導者研修のテーマとして「アセスメント」「家族支援」「チームワーク」を3大柱とし、研修を企画した（資料1）。当然であるが、こうしたベースともなる力や能力の獲得が数日の研修でなされるはずはない。しかし少しでも実践につながる研修を意識し、事前課題への取り組みから始まる一連の演習を主体とした研修を企画した。

そこで本研究では、この研修目標に沿うよう研修を企画し、参加者の主観的な感想を超えて、参加者が何を学んだか、および臨床現場で役に立つか否かをより客観的に評価し、それに基づいて、企画された研修について、さらに修正、工夫していく視点を導き出すことを目的とした。今回は、3つの柱のなかでも特に「アセスメント」に焦点を当て検討した。

アセスメントとは、生育歴、家族状況、日常の関わりながらの観察等を通して得られた様々な情報を総合し、ケースの本質的なテーマを探り、その後の経過を予測しながら適切な援助方針を具体的に打ち立てていくことである。それは自立支援計画に盛り込まれるもので、近年自立支援計画を児童相談所との協働の元に作成されることが児童福祉施設に求められているが、個別的で具体的な支援計画

が提示されておらず、抽象的、表面的な計画の域を出ないものが少なくないのが現状である。

研修ではアセスメント力向上に向け、様々な情報から子どもを把握し、本質的な課題を理解し、その上で具体的で有効な支援プランを作成できるための視点を獲得するために次の作業を参加者に求めた。

- ①「事例概要」（資料2）の作成：研修の事前課題として自身の関わった事例を一つ選んで、事例概要作成シートの項目にそって記載例を参考にまとめる。これは生育歴、家族状況、援助経過等からケース理解に必要な情報や経過を振り返った時に重要となるエピソードなどを取捨選択し、ケースを把握し、まとめる力を養うものである。

研修全体を通して、この「事例概要」は非常に重要な素材として扱う。研修の初日に、「事例概要」のケースについて、新たに具体的な援助プランを立てて持ち帰ることが研修の最終的な目的の一つであることを明示し、参加者はそれを念頭に置いたうえで、4日間の研修に参加することになる。

- ②事例概要の説明：センターでの研修において、事前課題でまとめた事例を5分程度で簡潔に説明し、グループ内でそれぞれの事例を共有する。これはケースの特徴や理解をまとめ人に伝える力を養うことをねらっている。多職種協働が求められる昨今、限られた時間の中で関係者に分かるようにケースの内容を伝える力は、以前にも増して求められている。またこの作業を通して、ケースを整理し客観視でき、研修で学んだことをケースに結びつけて冷静に振り返ることを助けると考える。

- ③講義：的確なアセスメントのために心的発達の理解を深めていくことは必須である。心的発達について、いくつかの講義によって一定の知識の習得を図った。直接関係するものとしては「子どもの発達と虐待」の講義である。

- ④演習：参加者それぞれが作成した「事例概要」をベースに日々の生活場面の中でどのように支援していくか、参加者相互の討議を行いながら、具体的なケアプランを作成するものである。

- 1) 具体的な場面の抽出（資料3：日常場面振り返りシート）：事例を思い浮かべながら「発達促進で大事だと思う場面」を挙げ、その時の子ども・援助者両方の「気持ち」、その場面の「出来事」も合わせて想起する。これは子どもの抱えた課題が日常のどのような場面で特徴的に表れているか、さらにその課題に対して援助者がどのように感じているかを整理するためのものである。

- 2) 「支援プラン作成シート」（資料4）の作成：同グループで話し合い、1)で抽出された課題に対し、実現可能な具体的な支援プランを策定する。策定に当たっては3つの側面から検討を行った。

- 〈1〉支援を行う上でのテーマ（子どもが抱えた課題等）

- 〈2〉支援を行う場面

- 〈3〉その方法

- 3) 支援プランの共有・再検討

参加者は、自らが関わる事例を振り返り、子どもにとって何が課題なのか、これまでの方針

がどうであったかを研修を通して考え、参加者の同士の協力を得ながら、新たに実効性のあるプランのいくつかを策定して持ち帰るといふものである。研修参加者は研修前から研修期間にかけて、対象ケースを念頭に置きながら研修に参加し、そのケースに還元できる具体的な援助プランを持ち帰ることが求められる。

- ⑤「振り返りシート」（資料5）への記入：その日の研修に参加して気づいたことや学んだことを、毎日の研修終了後、15分間で記述する。知識や気づきの定着を測るためのものである。「振り返りシート」の記入を通して、参加者は、「自分がどれだけ研修内容を掘り下げることができたのか」そして、「自分に必要なものは何か?」「何を学ぶことができたのか?」という自分自身のあり方について考えられるよう、以下の3つの枠組みで記述することを求めた。

- 1) ケースについての理解の深まり（5件法）と、深まった具体的な内容
- 2) 施設での日々の実践全体を見た時に必要に感じた事柄
- 3) 今日の研修の中で、印象に残った事柄

（5）研修の評価

研修の評価は次の4つの側面から行う。

- 1) 参加者の研修に対する感想：「研修後アンケート」（資料6）の回答
- 2) 実効性のある具体的な援助プランが策定できたか否か
- 3) そのプランが実際の支援において有用であったか否か（研修終了1年後に評価）
- 4) 研修を通しての知識がどれほど深まったか、新たに気づけたことの有無、自身のケースへの気づきの程度

1) については、研修終了後に、各研修プログラムに対して、「大変よい」から「工夫が必要」まで5件法でたずねた。また研修全体に対しては、「大変役に立つ」から「役に立たない」までの5件法でたずねた。こうしたアンケートによる評価方法はセンター開設（2002年）以来ずっと行っているものである。

2) については、「支援プラン作成シート」に基づき、援助プランが策定できたか否かに加え、どれだけ具体的な場面を想定し、分かりやすい援助方針であるかの質的な評定を行う。

3) については1年後アンケートを実施し、その有効性を尋ねることとした。今回の報告では研修実施後1年が経過していないため省かれる。

4) については、各日の研修の最後に記述した「振り返りシート」に基づき、そこに記載された参加者の気づきの具体性と多様性を評定した。

（注1）

「乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会報告書」は、地域保健に従事する保健師が、母子保健活動等において乳幼児虐待ハイリスク養育者を把握し、関係機関等との連携によって効果的な虐待予防の個別支援を行うために必要な基礎的知識および支援技術を習得するための研修モデルを開発・提示したものである。

この研修は＜前期＞3日間、＜後期＞2日間の5日間で、講義と事例検討、ロールプレイング、グループ討議等で構成される。

研修評価に関しては、「研修直後のインパクトを調査し、改善点を明確にすること（インパクト調査）」と「研修修了後、職場における研修成果を明確にすること（成果評価）」の2つの評価を実施している。「インパクト調査」の内容は、プログラムに対応する研修目標の達成の有無、あるいはその達成度を測定するものである。質問の1例をあげると「乳幼児虐待の起こる背景や要因について」の理解度を「よくわかる、すこしわかる、どちらともいえない、あまりわからない、ほとんどわからない」の5段階評定で聴取するものである。このような質問を、研修前と研修後に実施し、その差をもって、参加者の理解度を把握している。「成果評価」は、研修修了から半年後に実施する参加者の評価である。「研修で取り上げた支援技術はどのように役立ちましたか」など、7つの項目に自由記述で回答を求めている。

（注2）

「母子保健要員の研修体系策定に関する研究（Ⅳ）—研修技法による効果差についての基礎的研究—」は、現任研修で行われている代表的な研修技法（講義法、体験学習法、討議法等）の有効性と、それぞれの技法を用いた研修に対する参加者の評価について分析している。様々な研修技法を用いた10本の研修の参加者に対して、研修効果等を尋ねる質問紙調査を実施した。その結果、それぞれの研修技法には長所・短所があり、それぞれの研修目的に沿ってプログラムを構成する必要があること、特に、体験学習法は援助スキルを高めるためには有用であるが、研修期間・日数、参加者のグループ内の関係作りに留意する必要がある、そのことが研修効果に大きな影響を与えるということを明らかにした。また、研修評価に関しては、研修参加者、機関（施設）長、研修機関の3者の相互評価を取り入れたフィードバック・システムを構築することが重要と指摘している。

（注3）

「児童虐待をテーマとした研修の在り方について—子どもの虹情報研修センターにおける児童相談所、児童福祉施設職員対象の研修を通して—」は、平成14年度センター開設から5年間の研修について、都道府県別・機関施設種別の参加状況、参加者の経験年数、研修後アンケート、研修1年後アンケート等の分析等を行った。研修参加者の参加状況をみると、機関・施設による差が大きいこと、研修参加者の経験年数は、児童相談所関係の研修において経験年数の少ない参加者が多く、専門性の蓄積には課題が多いことが明らかとなった。参加者が求める研修内容をみると、機関・施設問わず「ケースカンファレンス」を挙げる参加者が多く、次いで「ケースの見立て」「保護者の理解と援助」のニーズが高い。センターでは、参加者のニーズ等を踏まえ、より効果的な研修方法を含めてのケースカンファレンスの充実と、本研究でも取り上げた「アセスメント」力の向上を目指した演習など、参加者のニーズに適った研修内容を検討している。

2. 方法

(1) 対象者

平成20年度児童養護施設職員指導者研修の参加者を対象とした。本研修は平成20年10月7日～10日に行われ、全国の児童養護施設の児童指導員や保育士等指導的立場にある職員、計84名の参加者であった。参加者の経験年数は0年～32年で、平均経験年数は9.76年であった。

(2) 評価の対象

- ①「研修後アンケート」
- ②「支援プラン作成シート」：演習において、具体的な支援プランの作成が書かれたもの
- ③「振り返りシート」(4日目)：アセスメントと支援プランの作成をねらった4日目終了時の「振り返りシート」

以上の3点を分析の対象とした。

(3) 分析(評価)の方法

①「研修後アンケート」の集計

4日目の研修作成プランに向けたプログラムのアンケート結果および研修全体に対するアンケート結果を集計した。各プログラムと研修全体について、「大変よい」から「工夫が必要」まで5件法で評価してもらい、これらは参加者の主観的な評価として扱った。

②「支援プラン作成シート」の評定

—記述の有無と具体性の評価—

作成された「支援プラン作成シート」に援助プランが記載されたか否か、かつ抽象的なレベルでなく、実現可能なものとして、具体的に生活場面に落としこまれているかを評価のポイントとした。

具体性・実現可能性に関する評定は「場面」と、「方法」について、それぞれ「具体的である、少し具体的である、具体的でない」の3件法にて評価を行った。評定は、センターのスタッフ3名が行った。

③「振り返りシート」の内容分析

—学びの内容と広がり—

「振り返りシート」は、研修各日の終了時に、その日の研修内容を通して自身を振り返ることを目的としている。「振り返りシート」の分析は、自由記述について、似たような内容を集め、カテゴリライズした。その上で、それぞれの記載がどれだけのカテゴリーを包括しているかを、1カテゴリーにつき1点として個人を得点化した。高得点ほど多様で、広い視点を学び、気づいたとみなした。

3. 結果

(1) 「研修後アンケート」の結果

演習について評価の結果、32名（45.1%）の人が「大変よい」、27名（38.0%）の人が「よい」と答えており、合計すると8割以上の人が肯定的な評価をしていた。「やや工夫が必要」と答えた人は5人（7.0%）と少なかった。結果を図1に示す。

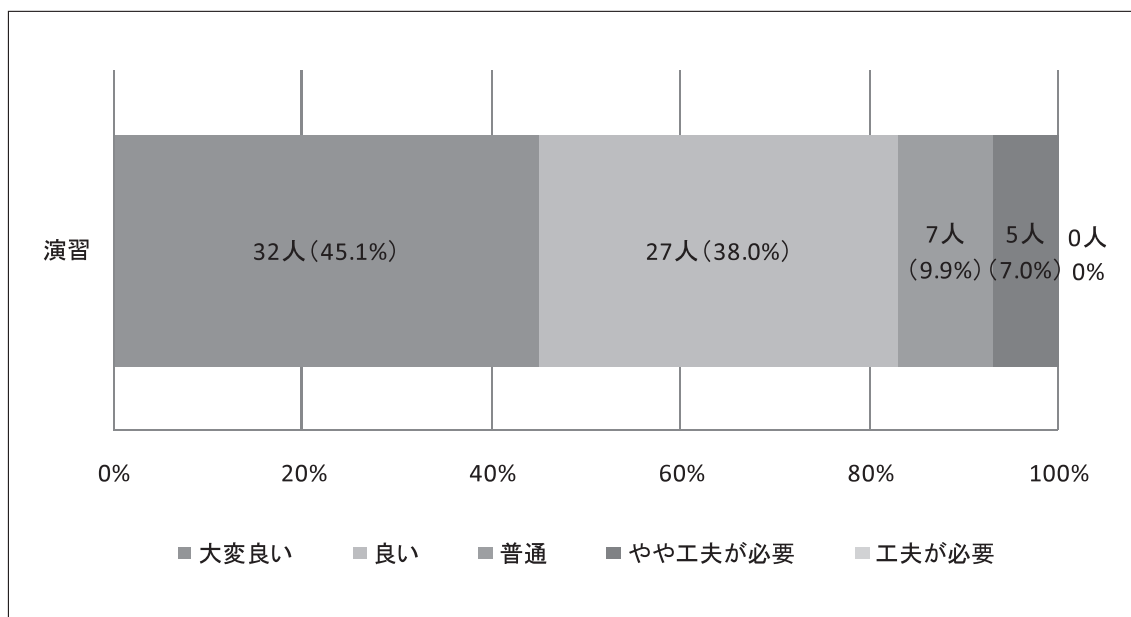


図1 研修後アンケートによる研修内容の評価結果

続いて、研修全体の評価の結果、51名（62.2%）の人が「大変役に立つ」、29名（35.4%）の人が「まあまあ役に立つ」と答えており、ほぼ全員が肯定的な評価をしていた。結果を図2に示す。

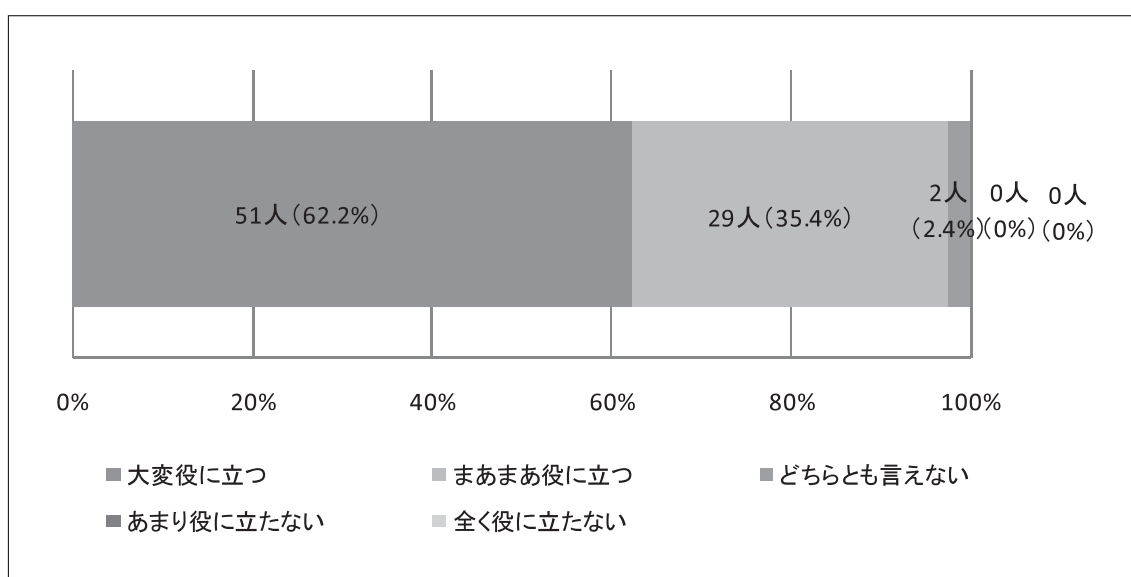


図2 研修後アンケートによる研修全体の評価結果

以上の結果から、演習そのもの、また研修全体に対して役に立つという結果が示され、参加者の主観として肯定的な評価が得られたことが示された。

(2) 「支援プラン作成シート」の分析

演習の中で各自が作成したこどもの支援プランについて、具体的な「場面」が想定できているか、具体的な「プラン」が挙げられているかの2点について、具体性をスタッフ（心理臨床家）3名で評定した。「場面」については特定の場面が想定されている場合は「あり」、ある程度場面が特定されている場合は「少しあり」、場面が特定されていない場合は「なし」の3件法で評価を行った。「プラン」については、その子どもにあわせた具体的な支援行動まで書かれている場合は「あり」、ある程度具体的な場合は「少しあり」、具体性がない場合は「なし」の3件法で評価した。

支援の「場面」の評定一致率は81.3%、支援の「プラン」の評定一致率は77.5%であり、おおむね一致していたといえる（表1）。

表1 評定一致率

	評定結果	
	(一致箇所/全箇所)	(一致率)
場面	65/80	81.3%
プラン	62/80	77.5%

場面の具体性を見たところ、「あり」が75.6%、「少しあり」は16.3%、「なし」は7.5%であった。90%以上の人々が、何らかの具体的な場面を想定しながら支援プランを作成することができていた（表2）。具体性があると評価した例として、「食事」、「就寝時間」、「朝の登校時」などの日課の中のある時間や、「大泣きしている時」、「他児とケンカをした時」などある出来事が起こった場面が挙げられていた。具体性がないと評価した例としては、「生活全般」、「日常の中で」など、抽象的で、場面が特定されていないものを「なし」とした。

表2 場面の具体性評定結果

	場面 (平均)	%
なし	6	7.5%
少しあり	13	16.3%
あり	60.5	75.6%
その他	0.5	0.6%
合計	80	100.0%

プラン内容の具体性を見たところ、「あり」が73.1%、「少しあり」は25.6%、「なし」は1.3%であった（表3）。「あり」、「少しあり」と答えた人は98.7%でほぼ全員が、何らか具体的な支援プランを考えていた。具体性があると評価した例として、「眠れない時には、一緒に布団に入る、明るさなどの環境設定をする」、「宿題を本児に合わせた分量、レベルにする」、「食事中着席できたら“よかったよ！”と両手タッチをする」、「交換日記をする」などであった。

表3 プランの具体性評価結果

	プラン (平均)	%
なし	1	1.3%
少しあり	20.5	25.6%
あり	58.5	73.1%
合計	80	100.0%

(3) 「振り返りシート」の分析

講義「子どもの発達と虐待」と演習「生活のなかでの支援のあり方」を受けた後の振り返りシートに書かれた自由記述から意味内容をまとめた結果、「1.情緒発達と愛着の理解」、「2.子どもの理解」、「3.支援のあり方・工夫」、「4.研修方法」、「5.施設の見直し・チームワーク」、「6.援助者自身の振り返り」の6カテゴリーを抽出した。各カテゴリーの主な内容を表4に記す。

表4 振り返りシートから抽出されたカテゴリーと内容

	カテゴリー	内容
1	情緒発達と愛着の理解	愛着形成の視点、理解
		虐待と愛着のメカニズムの理解
		愛着と心的外傷の理解
		情緒発達の理解
		心的外傷のケア
2	子どもの理解	子どもの気持ち、成長の理解
		子どもと職員（大人）の気持ちの違い
		子どもと職員の関係
		理論的なアセスメント
		日常生活の中での見立て
		治療的な見立て
		医学的見方

	カテゴリー	内容
3	支援のあり方・工夫	支援ポイントの整理 支援（ケース）の振り返り、確認、見直し、共有 関わりのスタンスの見直し 子どもの立場（視点）に立つ 子ども、家族と一緒に考える コミュニケーションの取り方 相手の気持ちを考えて支援プランをたてる 発達と援助の理解 相互性を持った支援 発達経路の再考 日常生活の支援の大切さ 支援の繰り返し 子どもとの時間の共有 子どもの気持ちの理解 子どもと職員の気持ちを理解しながらの具体的援助 具体的な支援 出来るところから到達させてあげる 気持ちを言葉として整理する 日常生活における治療的要素 個別援助のための環境 養育環境の見直し 治療的な環境作り しつけの方法 遊び、食事の重要性 食事場面のケアの大切さ 食事の両面性、重要性、束縛感
4	研修方法	演習の活用 シートの活用 研修効果 研修の振り返り グループの変化・醸成 グループワーク 他施設からの視点 第三者的に考えること 参加者の多様な視点
5	施設の見直し・チームワーク	エピソードの話し合い ケースカンファレンスの充実化 知識を施設へ伝えること 話し合いの方法 チームワーク

	カテゴリー	内容
6	援助者自身の振り返り	研修参加の必要性
		勉強の必要性
		専門的知識の必要性
		スキルアップの必要性
		意見を言うこと

以上の6カテゴリーを抽出した後、これらのカテゴリーについて、どれだけの人が記入していたか、参加者の振り返りシートを再評定した。それぞれのカテゴリーの内容についてカウントした結果、一番多かったのが「支援のあり方・工夫」で64名(81.0%)であった。続いて「研修方法」で41名(51.9%)、「情緒発達と愛着の理解」、「子どもの理解」39名(49.4%)であった。これらから、参加者が“支援”の視点を研修によって得られたことがわかる。結果を表5、図3に示す。

表5 カテゴリーカウントの結果

カテゴリー	1 愛着の理解	2 子どもの理解	3 支援のあり方・工夫	4 研修方法	5 施設の見直し	6 自身の気づき
人数	39	39	64	41	23	9
%	49.4	49.4	81.0	51.9	29.1	11.4

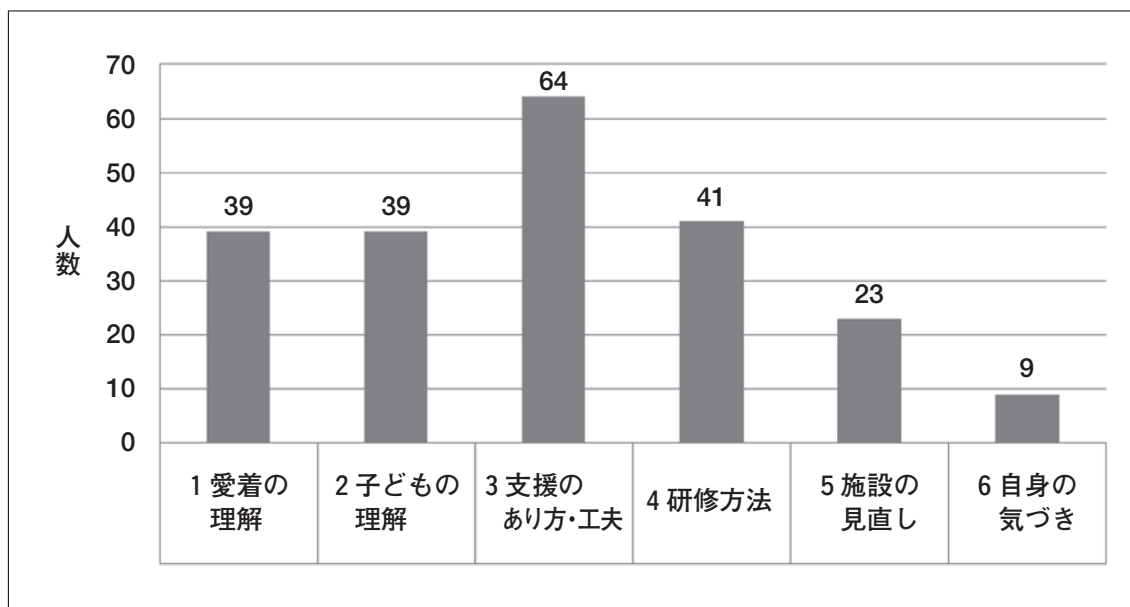


図3 カテゴリーカウントの結果

上記の6カテゴリーについて、各参加者が「振り返りシート」の中でどれだけあげられていたかを

再評定したところ、平均2.46カテゴリーであった。3カテゴリーをあげた人が一番多く36名（46.1%）、続いて2カテゴリーで24名（30.8%）、4カテゴリーで11名（14.1%）であった。これらから、大半の人が複数の視点を得ていることがわかる。結果を表6、図4に示す。

表6 カウント数人数結果

カウント数	人数	%
1カテゴリー	5	6.4
2カテゴリー	24	30.8
3カテゴリー	36	46.1
4カテゴリー	11	14.1
5カテゴリー	2	2.6
6カテゴリー	0	0
合計	78	100

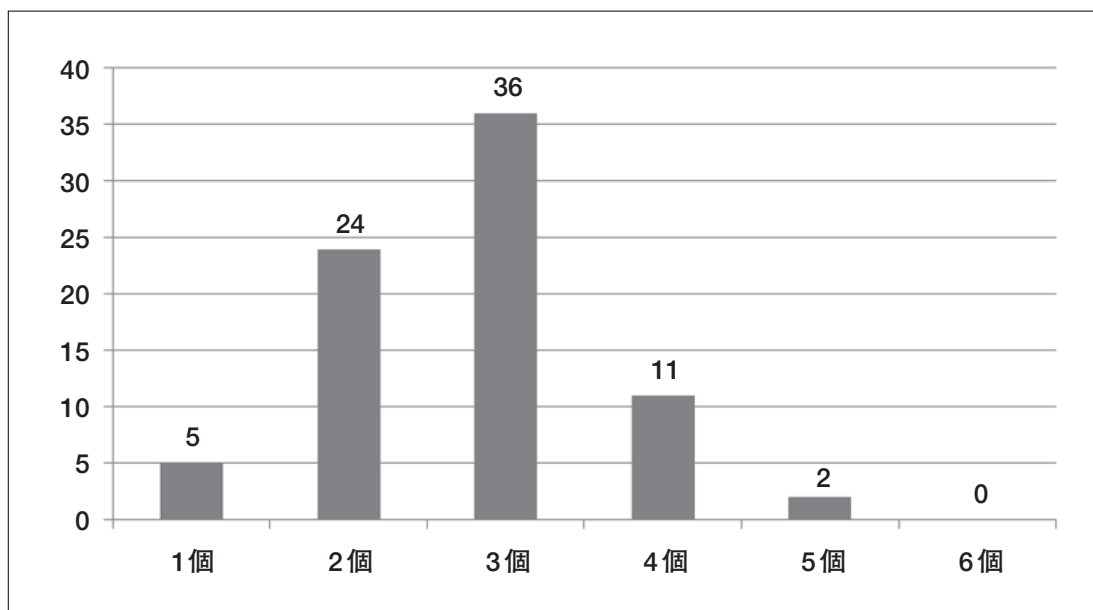


図4 カウント数人数結果

4. 考察

(1) 参加者の主観的な評価

研修後アンケートでは、ほとんどの参加者が研修に対して良い評価を行っているのが分かる。しかしこれらは参加者の研修に対する主観的な評価であり、参加者自身が研修から何を学び得たかは分からず、研修評価の妥当性は低いといえよう。こうした点を明らかにするためには、参加者に研修目的に沿った作業課題を求め、その達成度を分析することや学んだことの具体的な記述を求めそれを分析することが、研修評価の妥当性を高める上で必要となろう。そのため本研究では「支援プラン作成シート」と「振り返りシート」の分析を通して研修の評価を行うことが重要と考えた。次節以降これらについて述べる。

(2) 「支援プラン作成シート」の分析

分析の結果、ほとんどの参加者が子どもの具体的な支援に落とし込んだプランを立てることができていた。抽象的なレベルでなく、具体的な支援プランが立てられたことは、研修内容が実効性あるレベルに踏み込んだ内容であったゆえと考える。近年、児童福祉施設では入所にあたって、自立支援計画を児童相談所と共に作成することが求められているが、その内容については、支援プランとして「安心できる生活環境を提供する」、「愛着関係を形成する」などといった、抽象的かつどの子どもにもあてはまるような内容が少なくない。アセスメントとは極めて個別的なもので、その子ども固有の理解に基づいた具体的な目標であることが重要である。その意味で、研修内容は、具体的な支援プランを立てるための子どもを理解する視点や、支援の際の具体的な場面の抽出、プランを立てるための話し合いの必要性など、支援プランを立てる上でベースとなる事柄を実際に体験し学ぶ機会となったと思われる。「振り返りシート」の中で、「研修方法」そのものを学んだこととしての記述に複数挙げており、一つのカテゴリーとして抽出されたのもその表れであろう。

しかし、研修中に立てられた支援プランがケースにとって実際に有効かどうかは、この段階では分からない。これについては、1年後に参加者にアンケートを行い、分析する予定である。

(3) 「振り返りシート」の分析

振り返りシートの分析では、「1.情緒発達と愛着の理解」、「2.子どもの理解」、「3.支援のあり方・工夫」、「4.研修方法」、「5.施設の見直し・チームワーク」、「6.援助者自身の振り返り」の6カテゴリーが抽出されたが、いずれの項目も子どものアセスメントを行う上で根底を支える重要な要件となるものであり、研修効果が表面的なレベルに留まっていないことが示唆されよう。特に「子どもの支援のあり方・工夫」(81.0%)、「子どもの理解」(49.4%)についてあげている人が多く、アセスメントに直結する内容である。研修対象者は「指導者」であり、自分の担当しているケースだけでなく、施設内の全てのケースのアセスメントに関わる必要がある。単に自分がまとめたケースを振り返るに留まらず、他のケースのアセスメントにも応用が利くよう、具体的な演習から抽象化されたレベルでのケー

ス理解、把握がなされていることがうかがわれる。

参加者が2番目に高く記述したのは「研修方法」(51.9%)である。演習の形式自体が印象的であったようで、より積極的に研修に参加できたという意見も含まれていたと同時に、施設内での研修に活用して、施設全体のアセスメント力の向上を図ろうとする趣旨がうかがわれた。参加者個人の学びをいかに施設に持ち帰るかは、研修を企画する上で非常に重要であり、それがしやすい研修内容であることで、研修効果(ケースに役立つこと)を高めることが可能となる。

しかし各参加者が、6カテゴリーの内どれだけのカテゴリーを記入したかについては平均2.46カテゴリーで、3カテゴリーをあげた人が一番多く36名(46.1%)であった。1つの視点ではなく複数の視点を研修から学び取っていることがうかがえるものの、半分のカテゴリーに留まっていることは、(1)で述べた主観的評価ではほとんどが「良い」と評価している一方で、理解が深まった内容、必要に感じた事柄、印象に残った事柄等を実際に尋ねてみれば、主観的な評価ほどとりいれられた内容が少ないことが示唆された。ただし各参加者が研修から学んだ内容がどこまで自由記述に反映されたかは明らかでなく、学んだ内容の程度を把握する客観的な方法をさらに検討する方法があろう。

(4) 一定の評価が得られた要因

全体の結果を踏まえると、本研修のねらいはほぼ達成されたのではないと思われる。しかしさらに有益性を明らかにするためには、1年後のアンケート調査によって、今回作成し持ち帰った支援プランが有効であったかも含めた、客観的な情報を踏まえる必要があり、これについては次報で取り上げる予定である。

ここではとりあえずは一定の効果は得られたと考え、その要因を改めて整理、検討する。

- 1) 事前課題として事例概要を作成することで事例の振り返りを行うことができ、研修に入りやすかったこと。
- 2) 演習のはじめに事例をさらに簡潔にまとめる作業を行うことで事例のポイントをつかむことができたこと。
- 3) 2)で簡潔にまとめた後、事例をグループで共有することで、後の演習の準備ができたこと。
- 4) 支援プランを作成する前に、事例で取り上げた子どもに対して、課題となる生活場面や伸ばしていきたい生活場면을具体的に想起することにより、支援ポイントを絞ることができたこと。
- 5) 支援プランを作成する際、できるだけ具体的に記入できるようにシートに項目をあらかじめ設定しておいたこと。
- 6) 支援プラン作成過程においてグループで話し合うことで、お互いに助言・指摘し合って作成することでより具体的なものができたこと。
- 7) 振り返りシートへの記入は、単に評価測定のためでなく、そのこと自体その日に学んだことの定着化を促したこと。

上記の点が、具体的に支援プランをたてることができ、幅広い視点を得ることができた結果につながったと考えられる。

(5) 研修の課題（修正点や工夫すべきところ）

今回の研修形式はまだ試みの段階であり、評価を繰り返す中で、より効果的な研修方法・内容を見出ししていく必要がある。今後の課題として、以下の3点をあげる。

1) 研修における演習方法の改良

より具体的で効果的な（ケースに有益な）支援プランが立てられるような研修技法をさらに工夫することが課題である。ここには、場面設定の仕方、グループの大きさ、助言者の配置などを検討することが含まれる。

2) 支援計画に対するフォローアップ

研修はその時だけのものではなく、研修参加後も研修効果が持続できることが大切である。研修参加後、継続して相談にのれるようなシステム作りが必要である。

3) 事前課題の改良

現在、事前課題として事例概要の提出を求めているが、より具体的な支援プランをたてるためには、事例概要をまとめる段階で、さまざまな視点が入り入れられていることが必要である。そのため、事例概要を記入するだけで、ケースの流れを把握しケース理解が深まるようなワークシート形式の書式を作ることなどが課題である^(注4)。

(注4)

本研究を踏まえ、事例概要の記入シートの改訂を行った。参考に添付する（資料7）。

<謝辞>

本研修実施にあたり、お茶の水女子大学大学院の青木紀久代先生には、演習の企画・実施において多大なご協力を頂きました。感謝申し上げます。

<引用・参考文献>

加藤博仁・小山修ほか（1999）「母子保健要員の研修体系策定に関する研究（Ⅳ）— 研修技法による効果差についての基礎的研究 —」日本子ども家庭総合研究所紀要35, pp157-165.

甲能迪・増沢高ほか（2005）「児童虐待をテーマとした研修の在り方について — 子どもの虹情報研修センターにおける児童相談所、児童福祉施設職員対象の研修を通して—」子どもの虹情報研修センター研究報告書

乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会（2001）「平成13年度地域保健総合推進事業 乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会報告書」

乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会（2002）「平成14年度地域保健総合推進事業 乳幼児を虐待する養育者への支援技術の普及に関する検討会報告書」

四方耀子・川崎二三彦ほか（2009）「センター研修における事例検討の分析 — 児童相談所等と児童福祉施設74事例の検討 —」子どもの虹情報研修センター研究報告書

子どもの虹情報研修センター研修部（2009）「平成20年度専門研修を振り返って」子どもの虹情報研修センター紀要 No.7, pp153-173.

資料 1

児童養護施設職員指導者研修

1 目的

児童虐待に関する知見を深め、児童養護施設での適切な援助のあり方を検討し、施設における中心的、指導的職員としての資質の向上を図る。

2 テーマ 「虐待が子どもの発達に及ぼす影響」「被虐待児と虐待する親への理解と援助」「職員のチームワーク」

3 対象 児童養護施設で指導的立場にある主任指導員・主任保育士・家庭支援専門相談員・個別対応職員等

4 期間 平成 20 年 10 月 7 日（火）～10 月 10 日（金）

5 内容

	時間	科目	講師	内容
1 日目 午後	13:00	開 会		
	13:20	【講義 1】 児童養護施設の今日的課題	児童養護施設長	被虐待児の入所の増加に伴い、児童養護施設のあり方も大きな変化を求められている。被虐待児の援助のあり方など、児童養護施設が抱える今日的課題について理解を深める。
	15:20			
	15:45	【グループ討議 1】 児童養護施設の現状と課題の共有	参加者	それぞれの現場が抱える課題や取組みの工夫などについて意見・情報交換を行う。
	18:00			
	18:00	【振り返り】		本日の研修から得られたことについて振り返り、まとめなおす。
	18:15			
	18:20	【交流会】		
	20:00			
2 日目 午前	9:30	【情報提供】	子どもの虹情報 研修センター	専門相談事業、情報収集・発信事業等、センターの各事業についての説明を行う。
	9:45			
	9:45	【講義 2】 職員チームのあり方 ー良好なチームを目指してー	臨床心理士 児童福祉施設経験者	援助が難しい子どもに対して、チームで関わる必要があるが、一方で施設内の人間関係で悩む職員も多い。チームが歪む要因を理解し、良好なチームを作るためにどうあるべきかを学ぶ。
	12:00			
2 日目 午後	13:00	【グループ討議 2】 現場の苦労を分かち合う	参加者	日々の援助には多くの困難が伴う。疲弊する職員も多く、職員のメンタルヘルスケアも大きな課題となっている。現場での辛さ、苦痛を互いに分かち合い、情報を共有し合う中から、新しい援助の工夫を考える。
	15:00			
	15:00	【振り返り】		
	15:15			
	15:30	【リラクゼーション タイム】		
	16:30			

	時間	科 目	講 師	内 容
3 日 目 午 前	9:30	【講義3】 施設における家族への 援助	学識者 児童福祉施設経験 者	虐待を受けた子ども達の入所が増えると同 時に、その家族も援助を必要としているが、 家族への対応や援助は多くの困難が伴う場 合が少なくない。個々の家族を理解し、適切 な援助を行うための援助のあり方を学ぶ。
	11:45			
3 日 目 午 後	12:45	【事例検討1】 子どもへの援助	<ABCDグループ> 発表者：参加者 助言者：臨床心理士	児童虐待ケースについて、援助が困難であ ったケースあるいは比較的上手くいったケ ースについて検討する。8グループの内、4 グループが一緒になって事例検討を行う。
	14:30	【事例検討1】 (小グループ)	<E~Hグループ> 発表者：参加者 進 行：児童福祉施 設経験者	上記の内容のケースについて、残った4 グループは分かれて、別の事例を検討する。
	15:00	【事例検討2】	<EFGHグループ> 発表者：参加者 助言者：臨床心理士	上記の内容のケースについて、事例検討1 (小グループ)で別々だった4グループが一 緒になり、午前とは別の事例を検討する。
	16:45	【事例検討2】 (小グループ)	<A~Dグループ> 発表者：参加者 進 行：児童福祉施 設経験者	上記の内容のケースについて、事例検討1 で一緒だった4グループが分かれて、グル ープごとに別の事例を検討する。
	16:45	【振り返り】		
	17:00			
4 日 目 午 前	9:30	【講義4】 子どもの情緒発達とそ のケア	臨床心理士	子どもの心身の発達と虐待が発達に及ぼす 影響について学ぶとともに、これを踏まえた 援助のあり方について理解を深める。
	11:30			
4 日 目 午 後	12:30	【演習】 生活のなかでの支援の あり方	臨床心理士 子どもの虹情報研 修センタースタッフ	子どもたちの具体的なニーズにどのよう に対応していくかについて、討議や演習を 行う。
	15:30			
	16:00	終 了		

資料 2

平成 20 年度児童養護施設職員指導者研修 事例概要

受講者氏名	施設名	ケース数	性別	入所時年齢： (学年：)	現在の年齢： (学年：)
本ケースとの関係を教えてください。 <input type="checkbox"/> 担当ケース (年目) <input type="checkbox"/> 担当ではないが関わりのあるケース					
入所理由	虐待種別 (重複可) <input type="checkbox"/> 身体的 <input type="checkbox"/> 性的 <input type="checkbox"/> ネグレクト <input type="checkbox"/> 心理的	入所時の子どもの気がかりな問題			
家族の概要 (家族構成も示してください)					主たる虐待者： 実父 実母 実父母 継父 継母 その他()
生育歴					
経過の概要					
現在 (記述時) の子どもの気がかりな問題：					
ケースを振り返ってみて、以下の 3 点について、記述してください。					
a) 困難で苦慮した点	b) 役に立った取り組みや体験	c) こうすればよかったと思う点			

「事例検討」においてこの事例を 発表できる 発表できない (いずれかを選んでください。)

※ 提出された事例概要のなかから、ケースカンファレンス等での事例を選定いたします。発表された事例の資料は、検討後すべて回収し、研修参加者にも守秘を徹底していただきます。なお、プライバシー保護のため、事例の本質に関わらない限りの改変 (氏名、年齢、職業、関係機関名等) を行って提出して下さい。

日常場面振り返りシート

選んだ場面

	援助者の気持ち	思い浮かんだ出来事
①		

	援助者の気持ち	思い浮かんだ出来事
②		

	援助者の気持ち	思い浮かんだ出来事
③		

場面（例）

起床—朝食—登校—……………下校—学習—自由時間—夕食—入浴—自由時間—就寝
その他（ ）

Gr. [] 施設名

氏名

支援プラン作成シート

◆今後、こうしたらよいと思う具体的なプラン

1. 支援のねらい
2. 支援の場面
3. 具体的な方法

◆過去、こうしたらよかったと思う点

1. どの時点
2. 支援のねらい
3. 支援の場面
4. 具体的な方法

Gr. () 施設名

氏名



振り返りシート

研修事前課題の「ケース概要」で取り上げた子どもを念頭において、今日の研修の振り返りを行います。

(1) 今日の研修を受講して、ケースについての理解は深まりましたか (○をつけてください)。

1. 深まらない 2. あまり深まらない 3. どちらでもない 4. 少し深まった 5. 深まった

↓
深まった点を具体的に教えてください。

(
.
.
)

(2) 貴施設での日々の実践全体を見た時、今日の研修を受講して、どんな視点をもっと必要だと感じましたが。

(

)

(3) 今日の研修の中で、どんなところが印象に残りましたか (言葉など)。

(

)

記入日：10月 日 (研修 日目) 施設名 氏名 Gr. []



研修後アンケート

研修参加お疲れ様でした。今後の研修に活かしたいと思いますので、以下の質問に回答してください。

(当てはまる項目に○をつけて下さい。また必要事項を記述して下さい。)

I 研修の内容についての評価をしてください。

	大変よい	よい	普通	やや工夫が必要	工夫が必要
(1) 講義1：児童養護施設の今日的課題	5	4	3	2	1
(2) グループ 討議1：児童養護施設の現状と課題の共有	5	4	3	2	1
(3) 講義2：職員チームのあり方	5	4	3	2	1
(4) グループ 討議2：現場の苦労を分かち合う	5	4	3	2	1
(5) 講義3：施設における家族への援助	5	4	3	2	1
(6) 事例検討1：子どもへの援助 ※					
(A~Dグループ)	5	4	3	2	1
(Eグループ)	5	4	3	2	1
(Fグループ)	5	4	3	2	1
(Gグループ)	5	4	3	2	1
(Hグループ)	5	4	3	2	1
(7) 事例検討2：※					
(E~Hグループ)	5	4	3	2	1
(Aグループ)	5	4	3	2	1
(Bグループ)	5	4	3	2	1
(Cグループ)	5	4	3	2	1
(Dグループ)	5	4	3	2	1
(8) 講義4：子どもの情緒発達とそのケア	5	4	3	2	1
(9) 演習：生活のなかでの支援のあり方	5	4	3	2	1

※ご自身が参加された事例検討について、お答え下さい。

II 研修全体を通しての評価をして、あてはまる数字に○をつけてください。

	大変役に立つ	どちらとも言えない	全く役に立たない		
	まあまあ役に立つ	あまり役立たない			
* 研修全体を通して	5	4	3	2	1

III 今後の研修内容として希望するものを○で囲んでください。(複数回答可)

- 子どもの見立て 虐待の心身に及ぼす影響 保護者の理解と関わり 子どもの権利 ケースカンファレンス(事例検討)
 問題行動への対応 職員チームのあり方 発達について 発達障害について 性的虐待について
 関係機関との連携 情報収集と情報の扱い 施設におけるソーシャルワーク 施設退所後のアフターフォロー
 施設の形態や運営に関する事 その他 ()

IV 是非職場で聴かせたい講義等がありましたら、○で囲んでください。(複数回答可)

- 講義1 講義2 講義3 講義4 演習
 その他 ()

V 本研修についてのご希望やご意見、ご感想をお書きください。

VI 今回の研修におけるあなたの参加動機、目的は達成されましたか。あてはまる数字に○をつけてください。

	達成された	達成されなかった			
* 参加動機、目的の達成度	4	3	2	1	0

所属名: _____ 氏名: _____ 受講者番号()グループ()
 ご協力ありがとうございました。

資料7

平成21年度児童養護施設職員指導者研修 事例概要

受講者氏名	施設名	ケース仮名(仮名)	性別	入所時年齢： 歳(学年：)	現在の年齢： 歳(学年：)	本ケースとの関係： <input type="checkbox"/> 担当ケース (年目) <input type="checkbox"/> 担当ではないが関わりのあるケース
入所理由	施設種別(重複可) <input type="checkbox"/> 身体的 <input type="checkbox"/> 性的 <input type="checkbox"/> ネグレクト <input type="checkbox"/> 心理的	主たる虐待者： 実父 実母 養父 養母 その他()	継父 継母	このケースを選んだ理由を教えてください。		
家族の概要(ジェノグラム含む)	生育歴 (実際の年月日でなく子どもの年齢・学年で記入してください。)					
アセスメント・援助方針(入所時)			入所時の子どもの気がかりな問題		入所にあって配慮したこと	
経過(子どもの変化・成長/家族の動き)(実際の年月日でなく子どもの年齢・学年で記入してください)	職員チームの動き・役割分担・サポート体制	子どもの変化・育ち	子どもの変化・育ち	子どもと家族との関わり	施設と家族との関わり	施設と関係機関の関わり
年齢	職員の関わり・思い					
学年						

平成20年度研究報告書

研修評価に関する研究

—児童福祉臨床での有益性を評価の視点とした
研修プログラムの作成について—

平成22年 3月15日発行

発 行 社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

編 集 子どもの虹情報研修センター
〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045-871-8011 FAX. 045-871-8091
mail : info@crc-japan.net
URL : <http://www.crc-japan.net>

編 集 研究代表者 平山 英夫
共同研究者 増沢 高
大川 浩明
南山今日子

印 刷 (株)ガリバー TEL. 045-510-1341(代)